

善通寺蔵金銅錫杖頭考

萩原 哉（武蔵野美術大学）

香川・善通寺所蔵の国宝金銅錫杖頭は、他に類をみない豊かな装飾性と卓越した鑄造技術により、我が国に伝存する錫杖遺品のなかで頂点に位置する名宝として広く知られている。本錫杖頭は、弘法大師空海請来の寺伝を有すること、その形態に濃厚な唐風の趣が認められることなどから、空海帰朝の大同元年（806）をさかのぼる、中国唐時代・8世紀の遺品とみなされてきた。しかし、本錫杖頭に関する研究は、展覧会図録等の図版解説にその概要が示され、いくつかの考察もなされているが、なおその図像等の解釈は十分とはいえない。また、中国唐からの請来品とする従来の認識にも再考の余地があると思われる。

そこで本発表では、本錫杖頭について、まず空海請来の伝承が江戸時代以前にさかのぼりえないことを確認した上で、その形式、作風、図像等の特徴について検討を試みる。本錫杖頭は、輪の中段に括りをつけ輪郭を瓢形とする点、輪の内部に表裏計10軀の尊像群をあらわす点に特徴があるが、こうした形式上の特徴は、中国では9世紀後半以降に出現したものとみなされる。そして、輪の内部にあらわされた尊像群は、丸く大きな頭部、腰を強く絞り抑揚を強調する体軀のモデリングを示し、その作風は、中国唐時代のものとするには違和感があり、むしろ朝鮮半島・統一新羅時代の金銅仏などに共通するものにとらえられる。また、各尊の図像については、従来、一面は弥陀定印の阿弥陀如来坐像、他面は来迎印の阿弥陀如来立像を中尊とし、その左右に両脇侍の菩薩立像と天部形立像を配して、表裏一組ずつの阿弥陀三尊と一具の四天王を構成するものと考えられてきた。しかし、来迎印の阿弥陀とされる如来立像は、左手に粒状の円形持物の存在が確認でき、それは薬師如来として制作された可能性が高い。印相から阿弥陀に比定される如来像と円形持物を執ることから薬師とみなされる如来像を表裏に配する造像は、統一新羅時代の石塔や石仏、四面石仏などに多くの作例が報告されているが、それらが西方の阿弥陀と東方の薬師を意図して規則的に配置されたこととみなされること、そしてそこに統一新羅における阿弥陀浄土信仰との関わりが指摘されることは重要であろう。つまり、阿弥陀と薬師を表裏にあらわす本錫杖頭の制作も、それら統一新羅時代の造像と同様の基盤に立つものと理解されるからである。

以上の検討にもとづき、本発表では、中国唐時代・8世紀の遺品とみなされてきた善通寺所蔵の金銅錫杖頭について、それが朝鮮半島・統一新羅時代の9世紀末から10世紀前半ころまでに制作されたとする新たな見解を提示したい。従来、日本における仏教工芸史の研究は、主に中国からの請来品と、それを祖型として制作された日本の工芸作品を対象として進められてきた。本錫杖頭を統一新羅時代の遺品とみなす発表者の推定が妥当と認められるならば、中国からの請来品に意識が偏りがちであった仏教工芸史の研究に、新たな視点を提示することにもつながるであろう。